海外の学術提携校における短期語学研修のシステムとその拡充について

澤　泰人*

On the Further Development of the Short-term Language Training System under the Academic Partnership with an Overseas University

Yasuto SAWA*

Abstract : Concluded in 2003, so far our academic partnership with the University of Newcastle in Australia has allowed four students to take short-term language training at the Language Center there, with three of them completing the five-week training course in August, 2006. With the further development of this academic partnership and a growing number of students eager to get a chance to learn English at the center, it is crucial to make an overall review of the language training system itself, with special emphasis on its curriculum, classes, and tests, which are covered in detail in this paper. Based on the reports of two students who studied English at the center last year, this paper also aims to find out problems of the current system and to offer suggestions for the possible enhancement of our academic partnership as well as of the training system in the future.

0．はじめに

平成15年8月に本校とオーストラリアのニューカッスル大学との間で締結した学術交流は、年を追うごとに発展し、平成18年度には夏季休業中を利用して、本科生2名および専攻科生1名が、5週間の短期語学研修に派遣されている。また、これとは別に、本科生1名が、4月より1年の長期研修に派遣されている。

ニューカッスル大学では、海外、とりわけアジア諸国からの語学研修生を多数受け入れ、専用の語学研修センターにて集中的な語学研修を行っている。スタッフは、センター長を中心に約15名で構成され、それぞれが英語教授法を専門的に習得した練達の士である。派遣された学生は、ここで彼らの授業を最短でも5週間受講し、語学力を高めることになっている。

締結の翌年度に1名の学生を本校から派遣したのを皮切りに、本制度が発展の途をたどって3年になる。この間、確かに派遣学生の人数も増え、さらに将来の制度拡充に向けての展望が開けつつあるのだが、同時に、これまで派遣された学生の現地での実体験にもとづく報告をまとめ、問題点を洗い出し、今後の本制度の改善に向けて検討および提案をする時期に来ていると感じる。本校の国際交流の実務窓口を担当する筆者にとっては、その作業は重要な責務でもある。

この課題を遂行するために、本稿ではまず、平成18年度に本校より派遣した短期語学研修生2名の現地報告を基に、ニューカッスル大学語学研修センターにおける、カリキュラムおよび主たる授業、また各種テストの内容を概観する。次に、それらの持つ問題点を指摘し、またその具体的な改善策を示すことにより、更に改良された語学研修制度確立の指針としたい。

1．短期語学研修のカリキュラムと授業内容

1－1．レベル別クラス編成

語学研修の初日に実施されるのが、学生のレベル別にクラスを分けるためのプレイスメントテストである。ニューカッスル大学語学研修センターでの語学研修は、1クラスあたり15人程度を限度にした少数教育体制をとっており、このテスト結果を基に、レベル別に以下の4クラスに学生を分けることになっている。

（初級）Elementary English: This course is designed to provide students with the English they need for living and feeling comfortable in an English Speaking Environment.

(2006年11月24日受理)
＊宇部工業高等専門学校英語教室

（中級）Intermediate English: This course develops communication and literacy skills to a level where students can function effectively in an English speaking environment.

（上級）Upper Intermediate English: This course develops language skills necessary for participation in a wide range of social and vocational activities. During this course some work on English for Academic Purposes is introduced.

（アカデミック）English for Academic Purposes(EAP): This course develops all language skills with an emphasis on skills relevant to tertiary study. The course encompasses most facets of academic requirements including essay and report writing, note-taking, preparation for tutorials, strategies for listening to and understanding lectures, library research instruction and written and oral presentations.

これらのクラスは、レベル別に分けているだけあって、その授業内容もやり方も大きく異なる。そもそも「語学研修センター」という名称からして会話重視の授業を想像しがちであるが、そうではない。クラスによって、内容は実に多彩である。筆者は2年前にセンターを訪れた際、色々なクラスの授業を視察したが、例えば、初級クラスでは絵とリスニングを結びつけたボキャブラリー・ビルディング、中級クラスでは自己紹介によるロールプレイ、上級クラスでは放送内容を書き取るディクテーションを行い、さらにアカデミッククラスでは社会問題に関するディスカッションや自己の意見を表明するプレゼンテーションなど、レベルに応じた多様な授業を展開していた。それらは単に話す力だけでなく、読解力・語彙力や聴解力ひいては発表能力に至るまで、各分野が有機的に結合し、各能力が他の能力とのかかわりあいの中で総合的に伸長するように工夫されているのである。

本稿では、このうち、本校学生が実際に配属された「初級クラス」のカリキュラムおよび授業内容について、後に節を改めて詳述するが、その前に次節において、プレイスメントテストの具体的内容について触れておくことにする。

1－2．プレイスメントテスト

プレイスメントテストでは、学生の語学力が能力分野別に入念にチェックされる。テストには、リスニング・ライティング・グラマーの3分野がある。そして、まずそれぞれの分野別にレベル判定がなされ、次に3つの分野のレベルを平均的に勘案して、各学生のクラスが決定される。例えば、グラマーが高得点で上級と判定されても、残りの2分野で初級と判定された場合、クラスは初級となることがある。

リスニングは、録音された音声が流れ、それを書き取る、または空欄を埋めたり、あるいは内容に関する質問に答えるという問題が中心である。日本の大学等におけるリスニング試験と似ているといえる。グラマーは、空欄補充（選択問題を含む）や誤文訂正問題が主であり、ＴＯＥＩＣやＴＯＥＦＬの文法問題の形式と似たところがある。もっとも、これらと比べてレベルはかなり基本的なものである。実際、本校からの派遣学生も、グラマーに関しては上級と判断された。最後にライティングであるが、これは英語の質問に英語で答えるというものである。質問は、「自分の家族について」や「語学研修センターで何を身につけたいか」等、簡単な自由英作文形式となっている。派遣学生の報告によると、ライティングが最も難しい試験分野であり、受験学生の間でも、一番差がつく科目とのことである。つまり、上級以上のクラスに入るためには、ライティングで高得点を収めることが必須のようである。

1－3．カリキュラムと時間割

本節では、語学研修センターの基本的なカリキュラムと時間割について述べる。

まず、ここでの短期語学研修のカリキュラムは、5週間を1つの区切り（ユニット）として編成されている。そして、そのユニットが、1年間で9回提供されているのである。例えば、平成１８年の研修期間は以下の9ユニットに分かれている。

①1月 9日～2月 3日
②2月 6日～3月 10日
③3月 13日～4月 13日
④4月 24日～5月 26日
⑤5月 29日～6月 30日
⑥7月 17日～8月 18日
⑦8月 21日～9月 22日
⑧10月 9日～11月 10日
⑨11月 13日～12月 15日

なお、③と④の間（4月 14日～21日）、⑤と⑥の間（7月3日～14日）、⑦と⑧の間(9月 25日～10月 6日)、および⑨と次年の最初のユニットの間（12月 18日～翌年1月5日）に、それぞれ長期休暇が入る。

したがって、5週間が語学研修としての最短の期間であり、本人の希望によって、研修期間を延長するこ

ともできる。その場合は、上記のユニットをいくつか連続して取っていくというやり方になる。本校学生の場合は、短期研修の場合は、現状では本校の夏休み期間と重なる⑥の期間に限られ、延長はできないということになる。しかし、語学研修センターでの各国からの学生の中には、研修期間を延長し、数ユニット取って 10 週間以上滞在する例も珍しくない。なお、本稿冒頭で述べた１年間の長期滞在を選んだ学生は、平成18年のユニット④から始めて、次年のユニット②で修了し、帰国する予定である。ただ、この場合、本校に対しては休学を申請することになり、帰国後は休学申請時の学年から履修ということになる。学術交流は結んでいるものの、ニューカッスル大学との単位互換制度が整備されていない現状ではこのような状況にならざるを得ないのが実情である。

ここで、先述したクラス分けとこのユニット制カリキュラムとの関連について述べておこう。基本的に、あるクラスの授業を 10 週間受ける、つまり、ユニットを２期間履修すると、１つ上のレベルのクラスに上がるための修了テストを必ず受けることとなっている。テストの内容については後の節に譲るとして、これには合格基準点が設定されており、それをクリアしなければ次のクラスに上がれず、再度同じレベルのクラスで研修を続けることになる。逆に、担当教員が特に優秀と判断した学生は、授業を５週間、すなわち１ユニット履修した時点で、テストを受けるように勧められることもある。したがって、第１節で述べたようにセンターにはレベル別に４つのクラスがあるので、極めて優秀な場合には最短 20 週（４ユニット）で、また順調にいった場合には 40 週（８ユニット）で、語学研修の全課程を修了することができるというわけである。つまり、ちょうど約１年の滞在で、語学研修センターを卒業できるような配慮がなされているのである。

次に、時間割についてであるが、１日のスケジュールはだいたい以下のようになっている。

９：００～１０：００　授業①
１０：０５～１１：００　授業①
１１：０５～１２：００　授業②
１２：００～１３：００　昼休み
１３：００～１４：００　授業③
１４：０５～１５：００　授業③

上記からわかるように、昼休みと授業②を除いて、それぞれの授業の合間に、５分間の休憩を取り、１日に３コマの授業をこなすシステムになっている。これが、毎週月曜～金曜の週５日行われるわけである。

１－４．各授業の内容

本節では、本校学生が配属された初級クラスの各授業内容について詳述しておく。

前節で示した時間割において、まず授業①と③では、テキストやプリントを用いて、主としてリーディング・グラマー・ライティング能力向上のための各種演習を行う。

リーディングでは、英文を読んで、英語の質問に英語で答える。答えは、担当教員が学生を指名し、確認していくというオーソドックスな手法をとっている。リーディング素材としては、新聞や雑誌、あるいはパンフレット等の中から 200～250 語程度の英文を抜粋しているものが多く、これを読んで、その内容に関する数問の質問に解答するというものである。

グラマーでは、日常会話で必須の文型や文法項目を重点的に学ぶ。このクラスの学生は、基本的なレベルの学生がほとんどなので、基礎的な文法があやふやな者も中には在籍している。その意味でも、反復的な学習項目として取り入れられているようである。具体的には、動詞の時制および相・存在文・比較構文・準動詞・助動詞等を、穴埋めや誤文訂正や選択問題等の色々な形式で演習を課し、知識の定着を図る。

ライティングでは、様々なテーマが与えられ、それについての自由英作文が主となる。テーマは、自己紹介・ある状況を想定したＥメール・自分の将来の夢や希望等から、クラスの仲間の１日の生活についてなど、多岐にわたるものの、初級クラスの学生でも比較的書きやすい内容となっている。このことは、例えば、アカデミッククラスのライティングでは、テーマが医療・経済・国際関係等の高度な時事問題になっていることを考えれば、明白であろう。また、初級クラスのライティングでは、上述のグラマーと内容的に連動するよう工夫されている。グラマーで習得した文法項目や構文をライティングでも示し、作文する中でそれらを実際に用いて確認・習得ができるようになっているのである。

上記３分野の他に、テープリスニングとディクテーションが適宜行われる。ディクテーションは、まず何も書かれていない紙が配布され、次に担当教員が読み上げる文をそのまま聞き取って書くというものである。読まれる文は 100～150 語程度で、１つないしは２つのパラグラフから成る。テープリスニングは、あらかじめプリントが配られ、そこには絵や写真等が多く配置されている。テープでは、それに関するナレーションが流され、学生は聞き取った内容を基に、絵や写真とつなぎ合わせて解答していくというものである。例えば、以下のような形式である。

①２人の人が、各自の休暇とその休暇中に訪れた名

勝について、会話をしている。プリントには世界各国の名勝の写真と名前が印刷され、会話中に言及されたものを選択する。

②2人の人が、様々な都市について会話している。そこで特徴的にできることは何か、選択肢より選ぶ。

③ある人の休暇と旅行に関するナレーションが流され、その行き先・交通手段・滞在や買い物の内容を選択肢で選ぶ。

ここからわかるように、やはり初級クラスだけあって、解答はほとんどの場合、選択肢から選ぶようになっている。つまり、リスニングだけに集中していれば、正解できるように配慮されている。記述形式による解答は、リスニングとライティングの両方の能力を駆使することが要求されるので、より上級のクラスで取り入れられているようである。

その他、初級クラスの特徴として、ゲームがよく行われる。ゲーム内容は様々で、例えば、いくつかの平易な2～3行の文が並んでおり、それらを内容がつながるように並べ替えたり、比較級や最上級の書かれた紙が配られて、教員が元の単語を読み上げ、関連するものを塗りつぶす、ビンゴのようなものなどである。初級クラスでは、特に英語力の乏しいものや英語が苦手な者の割合が、他クラスに比して高いという現状を鑑み、なるべく興味を持たせる内容で、また授業中の気分的なメリハリをつけるという位置付けで、このような活動も取り入れられているのであろう。

次に、授業②の約1時間について説明しておく。この時間は、もっぱらビデオリスニングを行う。基本的には、授業①・③のテープリスニングの映像版と考えればよい。あらかじめビデオの内容に関する質問が印刷されたプリントが配られ、ビデオを見てそれに答える。映像による助けがある分、テープリスニングよりも興味を持って、かつ容易に課題に取り組みやすいという利点がある。また、このビデオは各回話がつながっていて、全体で一つのストーリーとなっているため、学生が次の展開を期待しながら、興味を持続して学習できるのである。この点からも、このビデオリスニングは月～金曜の毎日、授業②において行われているのである。この事実を考慮すると、語学研修センターの、特に初級クラスにおいては、リスニングに重点を置いて授業を組んでいることがよくわかる。これは、一定レベルのスピーキングには、まとまった量のリスニングが必要不可欠であるという基本的な事実に基づいたものであると思われる。

毎週金曜日には、授業②において、ビデオリスニングのかわりにレクチャーが行われる。これは、全てのクラスの学生が一斉にホールに集まって話を聞くもので、全クラスの学生が定期的に一堂に会するのは、これが唯一の機会といえる。ただし、その内容は、どちらかというとアカデミックや上級クラスの学生向けで、話もナチュラルスピードなため、初級や中級クラスの学生にとっては、ついていくのがやや難しい。もっとも、ゆっくり話される英語ばかり聞いていては上達が遅いとの観点からも、そうした学生にとってもこのような機会は必要であり、また、学生自身からも歓迎されている。

最後に、同じく毎週金曜日に行われる小テストについて触れておこう。これは、各週の学習の総復習と学生個人の到達度を測る指針として実施されるものである。午前9時から行われるこのテストは、ボキャブラリー・ディクテーション・リーディング・リスニングの4分野から成る。後三者は、前節で述べたような通常の授業と同じような題材・形式で実施される。ボキャブラリーは、前日にあらかじめ 20 の単語が書かれたプリントが配られ、当日、担当教員がそれらの単語を順不同に読み上げるのを聞き取って解答するという形式をとっている。スペルだけでなく、発音やアクセントも確実に把握しておかなければならない。なお、毎週実施されるこの小テストが、次節で述べる修了テストの土台となる。両者は、形式の面では似ているからである。

1－5．修了テスト

本節では、語学研修センターに入学して10週間（学生によっては5週間）経過した時点で、当初のクラスの修了を認定するために行われる修了テストについて、初級クラスの場合を例にとって、その内容等を紹介する。幸い、本校から派遣された2名の学生は、その優秀さが認められ、5週経過時点で、修了テストの受験を担当教員より認められた。彼らの語学研修の仕上げの試験ともなったわけである。

修了テストというだけあって、そこではリスニング・ライティング・リーディング・スピーキングの4分野が入念にチェックされる。得点はこれらの能力分野別に、原則として100点満点で示される。合格するためには、これら4つの分野のうち、少なくとも3分野で65％以上（理想的には70％以上）、残り一つの分野も 60～64％の範囲内の得点率をあげなければならない。そして、それをもとに、各分野の得点と合否を記載した「試験結果シート」が本人に渡される。「結果」欄に、”Pass”とあれば合格である。

リスニングは、それまでの授業の集大成という意味合いを持ち、ディクテーション・テープリスニング・ビデオリスニングの3種が行われる。形式は授業や毎金曜日実施の小テストと同じであり、ディクテーションとビデオリスニングは、それらよりやや難度が高い

程度である。これに対し、テープリスニングは、内容的にも話されるスピードもはるかにレベルが高いのが特徴である。制限時間は全部で60分である。

ライティングの問題も、普段の授業と同形式のテーマ作文であるが、採点が非常に厳しく、動詞の三人称単数現在時制の-sや冠詞のつけ忘れなども、逐次減点となる。あまり難しい構文や表現を用いず、グラマーで習ったことを上手く活用して解答を作成した方が、結果的に減点が少なく、得点が高いようである。制限時間は60分である。

リーディングも、普段の授業よりもかなりレベルが上がり、問題文も長文化する。長文は数問あり、それぞれの問題文に対して、その内容に関する設問が3、4問ある。制限時間が全部で60分と短いだけに、正確な速読力が要求されるので、意外に手ごわいと言える。

スピーキングテストは、英語でプレゼンテーションを行い、これに対して担当教員から評価が下される。初級クラスのテーマは、「オーストラリアについて」であった。広く各自の興味ある分野で、準備が可能なテーマである。事前に調べておき、まとめ、発表時にはＯＨＰかパワーポイントを使って行う。ただし、ＯＨＰの場合、使ってよいシートの枚数は３枚までであり、制限時間も３～５分と決まっていることから、要点を簡潔にまとめ、さらに聞き手の印象に残るようなプレゼンテーションが求められる。

なお、スピーキングテストは最後の授業中に行われ、残りの３分野は、最終の２日がかりで行われる。合否結果はその次の日に、教員より結果シートが封筒に入れて手渡されて判明する。

以上、本章では、主として語学研修センターでのカリキュラムと時間割編成、および各授業やテストの内容について、初級クラスを例に詳述してきた。次節では、これらを、短期語学研修をいかに効率あるものにすべきか、という観点から検討し、問題点を提示してみたい。

２．問題点と改善案

本章では、前章において概観してきた、語学研修のカリキュラムや時間割、および授業内容や各種テストについての問題点を探り、それらに対する今後の改善案を提示しておきたい。

第一に、プレイスメントテストとその後に振り分けられた各クラスおよび授業との関連性が問題となる。すなわち、プレイスメントテストの結果と、その後のクラス分けおよびその授業内容のレベルとが厳密に対応していないということである。例えば、本校の学生のように、グラマーは上級であるが、リスニングやライティングが初級と判定される場合がある。このような場合、前者と後二者の間には２段階のレベル差があり、これを一様に初級配属と決定するのはやや大まかな判定であるという印象を受ける。学生の報告によると、初級クラスに配属されたものの、リスニングやライティングは適度に手ごたえがあったが、グラマーは平易すぎて、既知の知識の確認に終始する傾向があったという。元々、短期間の語学研修である。なるべく効率に英語力を上げるという観点からすれば、この点は改善すべきであるといわざるを得ない。そこで、分野別クラス編成を考えるとよいだろう。本校学生の場合であれば、グラマーは上級、リスニングとライティングは初級クラスに所属するというものである。もちろん、学生によっては、逆にリスニングやライティングは得意だが、グラマーの基本的知識が足りないという者も存在するだろう。その意味でも、分野別の能力差を無視して一様なクラス編成をするのではなく、それぞれの分野の能力に応じたクラス編成が、語学学習の効率面からも望まれる。

ここで、分野能力別クラス編成をする際にさらに提案したいのが、プレイスメントテスト結果のデータベース化である。語学研修センターには、特に短期の研修に様々な国から多くの学生が入れ替わるような形で訪れる。彼らにはクラス分けのために必ずプレイスメントテストが実施されるわけであるが、この際、その結果を、学生別各能力分野別にデータベース化しておくのである。数年のうちに、膨大なデータが蓄積するに違いない。そこで、そのデータから、学生の分野別の能力の差異の傾向を見出せば、分野能力別クラス編成に役立つことだろう。あるいは、出身国や地方によって、一定の傾向も見出せるかもしれない。さらには、プレイスメントテストの分野別の得点をデータとして残しておけば、クラス分けをしてから一定期間経った後に、各学生がどの分野でどのくらい進歩したかが瞬時に検索・比較でき、担当教員による把握も、学生の個人単位で容易にかつ具体的になるだろう。

第二の問題点は、それぞれの授業相互の関連性である。先述したように、現在、語学研修センターでは、１日の時間割を主として３つに分け、それぞれの中で各分野の能力を伸張させていくという指導法をとっている。しかし、実情は、授業①と③において、主としてリーディング・リスニング・ライティング・グラマーを、バランスを考えつつ、それぞれを順次演習しているのであり、その意味では、授業①と③は同様の展開をしていると言える。結果的にはそれぞれの分野の技能を伸張させているかもしれないが、学生の立場からすると、個々の授業の各回の狙いや学習分野がいちいち変動しては、それらを念頭に置きながら学習する

のは大変である。それよりも、例えば、授業①と③の各２時間をさらに１時間ずつに分けて４コマとし、これにリーディング・リスニング・ライティング・グラマーの４分野の演習時間としてそれぞれ充てた方が、学生にも授業でやるべきことや習得すべき内容が理解しやすく、学習目標も立てやすいのではないだろうか。そしてその上で、例えば１週間単位で、グラマーで習った内容をライティングの時間で実践したり、リーディングで理解した内容をリスニングで聴解的に確認したりして、それぞれの授業にもっと関連性を持たせた方が、学習効果が上がるのではないかと考える。

第三に、先述の、学生のプレイスメントテストのデータベース化と関連するが、各授業における小テストの結果も、学生ごとに随時記録し、データベース化して、それを各授業担当の教員が共有し、かつ随時検索できるようにするシステムの構築が望まれる。ここで、もし上述のように、授業を４コマに分け、それぞれを各能力分野に特化した内容で展開すれば、そこで実施される小テストを随時データとして累積的に記録しておくことによって、学生個人の、各分野における伸長度がいつでも確認できるし、またその学生のどの能力分野が進展し、あるいは進展が鈍いかも把握できるようになる。また、そうしたデータを各授業担当の教員が共有すれば、教員間でも定期的に相談しあって、個々の学生に応じたきめ細かい、体系的な指導が可能となろう。

最後に、各学生のクラス修了テストの結果も、もちろんデータベース化して記録しておくことが望ましい。先述したように、修了テストでは、各能力分野別に得点が出るようになっている。この結果と、すでにデータベースに記録されている、最初のプレイスメントテストの結果とを照合することによって、学生の個人別に、どの能力分野が向上し、また逆にどの分野の伸長が鈍いかが一目瞭然となる。そうすれば、例えば、リスニングだけはさほど進歩が見られないので元のレベルのクラスに据え置き、その他の向上した分野はさらに上位のクラスに進めるという、個々人の各能力により具体的に対応した指導が可能となる。これは、すべての能力を一括してクラス分けしている現状では、実施が難しい。その意味でも、筆者が本章はじめに提案した分野能力別クラス編成が、ますます有効となるであろう。さらに、こうしたクラス編成にしておけば、プレイスメントテストと修了テストという、始発点と終着点の学生の成績結果を比較検討することによって、どのレベルのクラスのどの能力分野の授業が効果を挙げ、または逆に効果が薄く改善を要するかが教員側にもフィードバックされ、更なる授業内容や指導体制の改善につながることが期待できる。

３．おわりに

本稿では、学術交流提携校であるオーストラリアのニューカッスル大学に本校より派遣された２名の短期語学研修生の詳細な現地報告を基に、大学の語学研修センターにおけるカリキュラムや授業内容および各種テストについて詳述し、同時にそれらの抱える問題点を学生の学習効率の観点から提示し、それに対する改善案を提案してきた。その柱は、①分野能力別クラス編成、および②各種テストのデータベース化の２つに集約される。これらはともに、各教員が学生個々人の語学力を能力分野別に的確に知るだけでなく、それぞれの分野の伸長度を随時把握し、教員間でも連携を取って、より体系的な指導を可能にするであろう。その結果、同じ短期の語学研修期間であっても、これまでより効率よく学生の語学力が向上すると思われる。得意な能力分野はさらに伸長し、弱点分野はより基礎的なクラスでの研修を経て着実に地力をつけていけるようになるのである。

最後に、残された課題を挙げておく。まず、成績評価の問題である。現行のやり方では、短期の研修生の場合、結局は修了テストを受験してその合否を通知されて完了ということになる。もちろん、個々の能力分野別に得点は示され、それによって自分の能力把握はできるものの、これでは研修期間中の授業での取り組みやレポート・小テスト等の結果が全く反映されていないということになる。極論すれば、修了テストさえクリアすればよいということにもなりかねない。学生のモティベーションを維持するためにも、何らかの形で研修期間中の各課題に対する評価も修了時の評価に連動させることが望まれる。また、学生の課題遂行を支援するより一層の環境整備を期待したい。学生の報告によると、例えばプレゼンテーションやレポートを作成するために、放課後等にパソコン室に行って色々なホームページにアクセスして材料調査等を行おうとしたものの、英語だけのホームページでは相当に辛かったという。上級やアカデミッククラスの学生ならいざ知らず、初級クラスの学生にとって、いきなり現地のパソコンを用いて英語のみで調べものをするというのは、かなりの負担である。そのような学生のために、例えば相談員をパソコン室に常駐させるとか、あるいはパソコンによる調査の仕方やレポート等の材料の集め方等を平易に解説したマニュアルなどがあってもよいだろう。

いずれにせよ、これらの問題は、カリキュラムや授業内容、ひいては語学研修センターにおける指導体制全般にも関わりうる事柄でもあり、別に考察を要する。今後さらに多くの学生の報告を収集し、センターとも直接議論したうえで、稿を改めて論じることとしたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、平成18年7月17日～8月18日の5週間にわたって、ニューカッスル大学語学研修センターに派遣された、本校学生の発田将志・松永奈穂子の両氏には、現地滞在中から帰国後に至るまで、詳細な実地報告をいただいた。ここに改めて感謝申し上げる次第である。

参考資料

The University of Newcastle, Australia: *The Language Centre, The University of Newcastle*